

「土の思想家」安藤昌益の思想を問い直す（上）

～ 矯正教育への新たな視点を求めて ～

林 和治

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Philosophy of ANDO Shoeki

— A Reinterpretation of his Concepts of NATURE and EARTH
with a view to giving theoretical foundations to Correctional Education —

HAYASI Kazuharu

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In the 18th-Century Japan ANDO Shoeki formed an original Philosophy of NATURE on the principle of EARTH. Probably because of the unpopularity of his philosophy and severe criticisms of the existing feudal system, he was kept away from the circle of orthodox scholars until at last he was “forgotten.” He was kept out of people’s mind for more than a century. At last the time came when he was “rediscovered” and brought to mind again. In the Meiji period, about a hundred years ago, KANO Kokichi made known the existence of this Japanese contemporary of Jean Jacques Rousseau after a careful examination of manuscript copies ascribed to Shoeki. After the end of the Second World War the philosophy of Shoeki was treated in such a context and to such an extent as is due to him. E. H. Norman, Canadian diplomat and historian, did much to do justice to this long-forgotten thinker.

我が国の思想家の中で、特に「土」にこだわった特異な思想家がいた¹⁾。江戸中期、元禄から宝暦の世にあって、「自然」の根源に「土」を位置づけ、そこからこの宇宙のすべてが発生しているということを唱えた思想家、その没後100年余を経て狩野亨吉²⁾によって“発見”され、さらに50年を経て第二次世界大戦のあと、日本生まれのカナダ人外交官にして歴史家であるE・H・ノーマン³⁾をして『忘れられた思想家』と言わしめた思想家、安藤昌益である。

筆者は、非行少年の社会復帰を支援する矯正教育に携わる者であるが、矯正教育の実践の中で自然というものの持つ教育的な意味を問い続けてきた。その中で、「自然」についての特異な思想家といわれる安藤昌益の思想、とりわけその自然思想とは一体どのようなものであったのかに興味を抱くに至った。

そこで、その昌益における「自然」思想の考察を通して、あるいはその視点に立って、現代の教育、

なかでも筆者の関わる矯正教育の在り方を照射することを試みたのが、本論である。

まず、本稿（上）においては、昌益の人物と思想を概観することから始めたい。

1 人と著作

安藤昌益は、1703年（元禄16年）（推定）に秋田県に生まれ、1762年（宝暦12年）に同地にて病没した。この間、医師として活躍する傍ら、独自の自然思想を打ち立て、その思想に共鳴する者が遠くは上方からも師事したことが確認されている。

その著作は、刊本としてはわずかに『自然真営道』（3巻3冊、宝暦3年）が現存するだけであり、未刊のものとしては、実に101巻93冊⁴⁾に及ぶ稿本『自然真営道』及び5巻5冊の稿本『統道真伝』が残された。なおこのほか、『孔子一世辨記』（2巻）と題する著作の近刊が予告されているものの、現物の存在は確認されていない。なお、刊本『自然真営

道』は昌益の著作としては初期のものに当たり、時代的には、その後に昌益の生涯をかけて、校本『自然真営道』が編まれたものと推定されている。昌益

の著作は、明治時代以降の翻刻や復刻を除けば、写しを含めて、次のものの現存が確認（公表）されているに過ぎない。

昌 益 著 作 一 覧

著作名	種別	冊数	(仮名称)	所蔵	備考
自然真営道	刊本	全3巻3冊	村上本 慶応本 天満宮本	村上寿秋 慶応義塾図書館 北野天満宮	
統道真伝	稿本	全5巻5冊	慶応本 龍谷本	慶応義塾図書館 龍谷大学図書館	「糺仏失」巻のみ
自然真営道	写本	全101巻93冊	京大本	京都大学国史研究室	慶応本の写本
	写本		渡邊本	渡邊謙（大濤の子）	慶応本の写本
	稿本		東大本	東大総合図書館	12巻12冊のみ現存
	写本		慶応本	慶応義塾図書館	東大本とは別に伝わる 3巻3冊
	写本		渡邊本	渡邊謙	慶応本の写本
	写本		八戸本	八戸市立図書館	東大本とは別に伝わる 2巻2冊(1は内容重複)
暦の大意	稿本	上、中位・下2冊		八戸市立図書館	
確龍先生韻經書	稿本	1		八戸市立図書館	
自然真営道後編					現物伝わらず不詳*
孔子一世辨記	刊本	2			現物伝わらず不詳*

* 最後の2点は、刊本『自然真営道』の巻末奥付に「近刻」として出版が予告されている。

(参考：寺尾五郎「総合解説」『安藤昌益全集』第1巻)

昌益は、後述するような事情もあり、長い間その存在さえも忘れられていたところ、1899年に狩野亨吉が稿本『自然真営道』(101巻93冊中、当時既に2巻2冊散佚)を発見し、1908年になって狩野亨吉が談話の形で安藤昌益の存在を公表したことによって、没後150年を経て、新たな研究対象として浮かび上がることとなったのである。この大著は、しばらくの間、狩野亨吉が私蔵して研究に当たっていたようだが、後に東京帝国大学図書館に売却した。その直後、関東大震災によって大半が灰燼に帰してしまった。ただ幸いにも、震災の直前に12冊が東京帝国大学史料編纂掛長三上参次に貸し出されていたために完全喪失は免れた。しかしながら、全容に目を通した学者はこの狩野亨吉一人となってしまった。その狩野亨吉による唯一の研究論文が「安藤昌益」⁵⁾である。そしてその2年後、狩野の弟子である渡辺大濤⁶⁾により『安藤昌益と自然真営道』が公

刊された。

この後、時代の波の中で、研究者の間では次第に話題に上らなくなってしまっていたところ、戦後間もない1948年5月、カナダの駐日代表部主席であったE・H・ノーマンが、東大において「安藤昌益とその封建社会の批判」と題して講演、翌年12月には英語の論文"Ando Shoeki and the Anatomy of Japanese Feudalism"を発表した。明けて1950年1月、英語論文と並行して準備されていたその日本語訳『忘れられた思想家～安藤昌益のこと』が公刊された。ここに至って、「忘れられていた思想家」を外国人によって「思い起こさせられ」て戦後の斯界に大いなる活気が与えられ、それまで一部の専門家に限られていた昌益研究の裾野が一挙に広がった。こうして昌益に関する論文、著作も多数発表されるようになり、加えて、昌益の著作そのものも翻刻や注釈書が発行された。昌益全集の刊行も幾度か企画さ

れたものの完成にいたらなかったが、ついに 1986 年、現存する著作（刊本、稿本の原文及び書き下し）資料、原本復刻等を網羅して、安藤昌益研究会編『安藤昌益全集』（本巻 2 1 巻 2 2 冊、農山漁村文化協会、1982-1986）が完結した。

2 昌益の生きた時代

(1) 社会情勢

昌益は、1703 年（元禄 16 癸未年、推定）羽州二井田村（現在の秋田県大館市二井田）に生まれ、1762 年（宝暦 12 壬午年）同地にあって病没したとされている。時代はこの間、元禄、延享、宝暦と変遷し、癸未（みずのとひつじ）から壬午（みずのえうま）の 60 年が昌益の生涯であった。昌益の生まれた元禄時代は、江戸幕府開闢以来、將軍 3 代にわたって続いた武断政治も豊臣方の反幕府勢力とその後の不満分子の一扫によって一段落し、4 代將軍家綱（1651～）5 代將軍綱吉（1680～）と、時代は文治政治による幕藩体制の安定期に入っていた。昌益の生まれる 2 年前の元禄 15 年は、播州赤穂の浪人による討ち入り事件が起こった年でもある。

(2) 学問の世界⁷⁾

この時代は、多くの思想・文化活動が展開され、いわゆる元禄文化が開花し、学問が奨励されて藩校・寺子屋が開設され、多くの著述が成った時代であった。

既に鎌倉時代に伝わっていた朱子学が江戸幕府の御用学問となり、これに陽明学が加わり、古学・折衷学などが起こって儒学が栄え、著名な学者としては、藤原惺窩、林羅山、林鷺峰、木下順庵、新井白石、室鳩巢、山崎暗斎、中江藤樹、熊沢蕃山、山鹿素行、伊藤仁斎、伊藤東崖、荻生徂徠、太宰春台などを挙げることができ、さらに、貝原益軒、渋川春海、西川如見、関孝和、山脇東洋、吉益東洞、新井白石等の本草学者、曆学・天文学者、数学者、医学者、洋学者が輩出した。

特に、自然学関係についてみると、従来は大陸伝来の学問によっていた曆学も、西川春海は独自の貞享曆を完成し、関孝和は数学（和算）において今日の微積分に相当する高度な算法を考案し、医学においては古医方において死体解剖が行われ、新井白石、

西川如見らは西洋の学問に大きな関心を示すなど、元禄文化の多様性、方向性、深化性には特筆すべきものがあると言えよう。

ちなみに、同時代史的に、西洋において昌益を挟む前後 100 年を概観すると、まさしくこの 17 世紀から 18 世紀にかけては、かの E・カッシーラーが、大著『啓蒙主義の哲学』において、その壮大な知的世界を描き出した、まさしく「啓蒙主義」の時代であったが、大きく捉えれば、二つの対立する潮流の存在が指摘される。すなわち、デカルト、パスカル、スピノザ、ライプニッツに至る、いわゆる「大陸合理論」の形而上学の流れ、それに対して、ホッブス、ロック、パークリー、そしてヒュームに至る「英国経験論」と呼ばれるものの流れである。そして、極めて雑駁な捉え方ではあるが、その後に登場するフランス 18 世紀の思想家ルソー、またディドロ、ダランベール、コンディヤックといったいわゆる百科全書派たち、そして忘れてはならないドイツのカントが、それぞれ異なった形ではあるが、この大きな流れを吸収し、新しい時代に向けて新しい思想を創出していく大きな役割を担ったといえることができるだろう。

3 昌益はなぜ「忘れられた」思想家となったか

(1) 「忘れられた」道のり

～「発見」と「公表」と「研究」～

昌益が「発見」されたのは、1899 年（明治 32 年）のことである。その時代は、政治的・社会的には、自由民権運動の高揚と弾圧の時代を経て、1889 年の大日本帝国憲法発布、1890 年の第一回総選挙と通常国会の召集、1894 年の日清戦争、そして 1904 年の日露戦争に向かっており、また、江戸末期のいわゆる不平等条約が改正されて新たな条約が締結される一方、1911 年の田中正造による足尾鋳毒事件に関する質問書提出などに見られるように社会・労働問題に人々の目が向き始め、労働組合の結成、社会主義思想への関心の高まりがあり、1900 年の治安警察法の制定を経て、1910 年のいわゆる大逆事件に至る、激動の明治後半期であった。

このような時代に、我が国の貴重な古典籍の収集を行っていた第一高等学校長狩野亨吉が古書肆から、

上述のとおり101巻の大著、校本『自然真営道』を購入したのが、ここでいう「発見」である⁸⁾。

狩野亨吉はこの「発見」から9年後の1908年、雑誌記者に対する談話の形で安藤昌益の存在を初めて公表⁹⁾した。その談話は「某文学博士」の語ったところとして匿名でなされており、その語り口調も極めて慎重であり、時代に配慮した様子を読みとることができる。150年の眠りを経て、昌益の名が近代日本に登場する記念すべき談話であるので、少し詳細に見ておこう。

その談話を紹介する記事は、「記者一日某文学博士を訪ふ」と書き出されている。また、記事を匿名としたことについて、この記事が聴取した談話の全部ではないこと、当該思想家の学説を記者が十分理解していないこと、編集締切が切迫しており記事の紹介を博士が甘諾されるかどうか分からないということを、その理由に挙げている。続いて「読者中幸に本記事の主人公に就て、多少たりとも、知る所あらば、本誌記者に寄せられよ。附記す、博士今一層の研究を積まれなば、本誌は、博士に乞ふて、其精細なる研究を寄せらるゝことを乞はんとする者なり。」と書き、前の断り書きに真実味を持たせてもいる。

この某文学博士は、「自分は暇があれば、日本の文明史とまで行かぬまで(ママ)が、日本国民の知力発展史を研究して見たいと思ふて居る。」と語り始め、徳川時代に「哲学方面といはうか、日本では唯一の、又大なる哲学者とも云ふべき人がある。」と一人の人物を持ち出した。そして、「此大思想家は大方大抵の人が知らない、其は何故かと言へば、此人の書を誰も読んだ事が無いからだらうからだ。其人は今から百五十年程以前の人といふ事は分明したが、無論当時其書は出版されず、今日までも出版されず、僅に此写本が残つて居るのみだ。」とし、その写本を一読してみたところ、書いてあることがわかりにくい、よく読んでみると、なかなか捨てる難いという。最初は、その難解さから「狂人」の書いたものではないかとも疑ったとも語っている。

而して其れに、書いてある事が、一寸見ると、少しも分からぬ。自分も最初は此書は狂人が書

いたのだらうと思つて、手に入つた後も当分は能く読まなかつたし、又中には狂人的様な論を書いてるし、文字の使用なども全く独得だから十分気を付けなかつた。然し段々読むと、中々捨てる難い面白い所がある。左様、此本は古本屋から買ったのである。著者が門人がゝ書いたらしいが、種々講究して見たら、此字は著者自からでは無い様だ。」(『内外教育評論』第3号)

そして記者に対してその写本を見せた上で、「著者の人物性行といふのか子、其れが能く分らん、それを知りたいのだ。」と言いつつ、当時分かっている範囲の昌益のプロフィールを紹介して、「日本の哲学者といふと誰も能く三浦梅軒(ママ)を挙げるが、自分の見る所では、梅軒などよりか、遙かに大規模で、哲学観が深い」「此人は梅軒などゝ比較すべきものでない。」と、その大思想家を高く評価している。そして「此書には本名を名乗つて無いが、種々探索して名丈を知る事を得た。而して此人は自分の説の解せらるゝは百年の後を待つと言つて居る。」と紹介している。しかし、その博士の談として昌益の名は出てこない。

記事は、これ以降は博士の談ではなく、記者が「博士から其主要の部分を知り得る巻を拝借し」たが、まだ十分に理解していないので、その概要を紹介するに留めるとして、記者の理解した範囲のこととして書き表されている。さらに、「其説を何故に博士が好んで世に紹介されぬか」ということについて、それは「此人の哲学観が一種の社会主義、又は無政府主義に類して居るから、今の思想界に之を紹介するは、面白くあるまいとの懸念かららしい。」と、某文学博士の慮りを推量の形で表している。そして、「彼の説は儒にあらず、仏にあらず、老にあらず、全く独得で、種々考へた後に、此人世宇宙の大原理を互性活真と観じた。而して彼は現代は法世である。人世社会の理想は自然世にある」「而して彼の自然世の本旨は農本主義」と解説しているのである。記事は最後に、「此大思想家とは誰ぞ、博士が種々研究して知り得た所では、安藤昌益といふ名である。幸に此人に就て知る所の人は、記者の許に御報あらば、難有存じます。」と結んでいる。

このように、安藤昌益の名が明らかにされた記念碑ともいべき某文学博士の談話（記事）は、記者による間接表現と推量という形で慎重な配慮の下に紹介された。しかし、その内容は2週間もしないうちに社会主義者の発行する『日本平民新聞』¹⁰⁾の記事となって報道され、「百五十年前の無政府主義者・安藤昌益」として一般国民の知るところとなったのである。そして、このこととの因果関係は明かではないが、その2年前の1906年から京都帝国大学文科大学長の職にあった狩野亨吉は、この年の10月21日、病気を理由にその職を辞し、以後は終生、在野の研究者として過ごすこととなった。あるいは、狩野は、既に公職を退くことを決意し、用意周到新たな人生を文献収集への没頭という世界に求める覚悟の上で、学界からの訣別の辞としてこの談話に踏み切ったのかも知れない。

こうして公表された昌益の存在であるが、前述のとおりその2年後には大逆事件が起こり、先に『平民新聞』を創刊して「平民主義」を主張していた社会主義運動家の幸徳秋水ら12名が処刑されたといった社会状況を反映してか、昌益の名が再び学界等に登場するには、いわゆる大正デモクラシーの時代を経ねばならなかった。

昌益が、その発見者の手を放れて一般の学者の研究対象となり始めたのは、1920年代半ばのことである。1916年（大正5年）吉野作造が民本主義を主張し始め、18年にはいわゆる米騒動が発生している。パリ講和会議が開催され第一次世界大戦の終結した19年には朝鮮では「三・一独立運動」、中国では「五・四運動」が起こっており、我が国では、平塚らいてう・市川房枝などの新婦人協会が結成され、日本最初のメーデーが実施された。翌21年には鈴木文治らによる友愛会が日本労働総同盟となり、22年には全国水平社、日本農民組合が結成されている。23年の関東大震災に際しての流言飛語などが

ら朝鮮人の虐殺や社会主義者への弾圧があり、さらに25年には治安維持法が公布され、昭和に入るとファシズムが台頭した中で、治安維持法と「抱き合わせ」に制定された普通選挙法に力を得て、昭和初期に向けて社会運動は一層の高揚を見せた。こうして多数の社会運動団体設立や政党結成が相次ぎ、社会運動思想の研究、社会運動関係書籍の発行が加速度的に増加した。

このような時代にあって、久しく沈黙していた狩野亨吉は28年「安藤昌益」と題する論文を発表している¹¹⁾。社会運動の高まりの中で、慎重に抑制を利かせながらも、我が国の思想家に、このような革新的な思想家がいたということをダイナミックに紹介している。続いて、30年には、渡邊大濤が『安藤昌益と自然真営道』と題する著作を公表し、狩野亨吉による安藤昌益の発見からの経緯を綴り、併せて昌益著作の一部を写真で、また随所に抜き書きを引用しつつ、昌益思想の概略を紹介している¹²⁾。これが戦前唯一の、昌益に関するまとまった研究書となっている。

その後、第二次世界大戦終了の頃までは、昌益に関する部分的な研究や、昌益思想の一般的紹介は断続的に行われて、狩野によって眠りを覚まされた昌益が、一部の学者・研究者によって辛うじて命脈を保ったというべきであろうか。その研究の大半は学術研究であり、一般国民の目に触れる出版物はほとんど発行されていない¹³⁾。

参考までに、『安藤昌益全集』（前掲）第1巻に掲載された「安藤昌益関係文献目録」をもとに、戦前の研究状況を種類別・年別に整理しておきたい。

戦前における昌益研究（著作・論文等）

種類	著述年	件数	備考
著作	(1930)	1	「安藤昌益と自然真営道」～上述（渡邊）
翻刻・訳文	(1934)	1	「大日本思想全集」
	(1936)	1	「日本哲学全書」

論説・研究	(1900 - 09)	1	(雑誌記事：談話)～上述(狩野)
		1	(新聞記事)～上述
	(1910 - 19)	0	
	(1920 - 29)	4	(論文)
	(1930 - 39)	10	(論文)
	(1940 - 43)	5	(論文)

(参考：寺尾五郎「総合解説」『安藤昌益全集』第1巻)

(2) 「忘れられた」理由～昌益の思想の故か、時代の故か～

昌益はなぜ「忘れられた」のか、いかなる事情があって「忘れられた思想家」になったのか。昌益思想に忘れられる理由が潜んでいて「忘れられた」のか、あるいは、時代が、人々がこれを受け入れず「忘れられた」のか。まずは、昌益の生きた時代に焦点を当て、次いで、昌益の思想が「発見」されたあとの時代に目をやって考察してみたい。

昌益の生きた時代は、前項に見たとおり、徳川幕府時代の武士の文化の最盛期であり、封建制の堅い制度の中で、専ら体制を前提とした文化が花開いている時代であった。また、視点を変えれば、その時代は將軍を頂点とする武士階級による農民階級の搾取の構造が不動のものとなっている時代であり、支配階級における人間関係の規範は、中国伝来の儒教・朱子学であった。

そこに登場した昌益の思想は、自然の有様を論じる側面を持ちつつ、同時に、他の側面においては、上下関係を否定し、現存の実定的な体制を相対化し、徹底的に批判するものであった。それは、自ら農耕に従事して食物を得るという直接的な労働こそが人間の真の労働であり、額に汗する者からの搾取は、それこそが耕さずして貪る「不耕貪食」であり、「盗乱」をもたらす天下の大罪であるとして、封建制の武士支配を根底から否定する思想であった。

昌益は、その思想を直接に世に出すことについて、当時極めて慎重であったようであり、唯一の刊本『自然真営道』は、医学書としての体裁を持ち、整然と漢方医学の古典『黄帝内経』及び本草学の古典『本草綱目』並びに『易経』の批判を通じて昌益独自の自然観、医学を展開している。まさに昌益自身が、自らの思想が時の幕府を刺激することについて十分

な認識があり、しかしその思想を何とか世に浸透させ、後の世に残すことを考えたが故に、特に「享保の改革」以後、「洋楽」「蘭学」に代表される「自然科学」が幕藩体制を補強するイデオロギー的・技術学的支柱として是認されていた事情を背景として、慎重な構成と刺激の少ない表現にした上で、そのエキスを世に問うこととしたものとも考えられる。この点について、野口武彦は「刊本『自然真営道』では昌益はきわめて慎重に、言及する領域を彼の全体形の中でいわば自然科学的部分に当たるものに極限している」と指摘し、さらに、稿本『統道真伝』は、その表現が稿本『自然真営道』に比して「より穏和であって、昌益とその一門がみずから信奉する思想の表出に慎重さと細心さをもつてのぞんでいたことをものがたる」¹⁴⁾と述べている。

昌益の没した直後、彼の業績を称えた石碑が建立されたが、それを廻って支配層の末端から圧力がかかり、結局はその石碑を取り壊すことで決着したことから、彼の生きた時代にあつて、すでに彼の思想に反権力性のおいが、こうした事態を引き起こすこととなったと考えられよう。

この碑文には何が書かれていたか、長い間一切不明であったが、1974年に旧家所蔵の古文書から「石碑銘」の写しが発見された¹⁵⁾。これによると、安藤家は代々農業に従事していたがいったん没落し、それを昌益が復興した。その姿はまさに「守農大神」と称えられるにふさわしい人物であると記し、続いて、昌益思想に沿ってこの世界を描きながら、次のように結んでいる。

【・・・後世誠二守農大神ト言フベシ。】

【転下広シト雖モ是レヲ知ル者無シ。・・・】

故二転真の妙道廃ル。予、之レヲ悲シミ、転真

ノ妙道八俱ニ一和スルヲ明カシ得テ、是レヲ後世ノ為ニ修ス。】

（「二井田史料」『安藤昌益全集』第14巻（資料編）

つまり、昌益思想の後継者たちからは、長く農業に従事しながら故あって没落した昌益の家系を復興させた功績は誠に大きく、「大神」と言われるにふさわしいとまで称賛され、神格化されているとさえ取れる碑文である。

これに対して、同時に発見された『掠職手記』には、次のような記述がある。（原文は、候文）

【昌益三回忌十月十三日晚より十四日朝迄、当寺温泉寺菩提所故、請役ニテ法事執行申候。尤、相伴人右昌益門弟仕候由。則、十四日晚門弟中取集り、魚物料理ニテ祝儀致候由。】

（「二井田史料」前掲）

昌益の没後の三回忌を温泉寺という菩提寺で実施したあと、門弟たちは夜通し魚料理にて祝儀を行ったというのである。これを機に、寺社を仕切っていた掠職が事情を聴取しつつ圧力をかけ、門人や村人をかばう村役人たちからは何とか切り抜きたいとの嘆願・交渉がなされたが、結局は、安藤家の所払い、石碑の破碎と跡地の原状回復を命じられて決着した。これらの史料は、当時既に、昌益の思想が当地に浸透し、寺社等の支配勢力の反発・不興を買っていたという背景があって、昌益の三回忌がその巻き返しに利用されたのではないかと推測されている。

おそらく、こうした事情があって、昌益の名は表だって語られることがなくなったのであろう。これまでの研究によれば、既述のとおり昌益の公にされた著作は刊本『自然真営道』のみであり、その売れ行きもそれほど広範ではなかったのか、頒布本の発見がほとんどない現状では、当時の知識人層の中にも、さほど浸透することがなかったとも考えられよう。それは、本当に理解されなかったのか、あまりの革新性に危険視されたのか、そして書庫の奥深くに秘蔵・退蔵されてしまったのか。いずれにせよ、今後、この昌益唯一の刊本が多数発見されればその流布についても研究が進むであろうし、またどのよ

うな評価を受けたかについても、解明が進展することであろう。

なお、昌益が何故に広く世人に知られなかったのか。渡邊大濤も、この誰もが抱く疑問について、『安藤昌益と自然真営道』の中で、「発見」者である狩野亨吉の談を引用しながら言及しているので、ここに書き留めておきたい。

さて其次に起る疑問は、これほどの人物が何故に広く世人に知られなかったか。何故に彼の著書が世間に行はれなかったのかと云ふことである。これにつきて狩野博士は談られる。

「当時の学者が、三教以外に何事をも考へ得なかつた間に在って、斯かる斬新なる思索を徹底せしめ、大胆なる抱負を実現せしめようとしたことは、啻に視聴を聳動する種類のことであるのみならず、實際重大なる問題を惹起する性質のものであるから、極めて謹慎なる態度を取り、軽率なる行動を避けたため、広く世人の耳目に触ることなく、其結果遂にこの破格的大人物の存在が忘れられるやうになったことであらう。また彼の刊本があつたにも係らず徳川時代を過ぎ明治に入るも安藤昌益の名が人の口に上らない所を見ると、当時何等の反響を起さずして、いつしか忘れられて了つたものであろう。大方彼の文章の不味いのと解し難いとに呆れて、思想の卓越した所を理解するまでに注意しなかつたのではあるまいか」云々。

更に不思議に堪へないことは、彼が殆んど日本全国に行脚して自己の主義主張を鼓吹し、同志を督励し、理想実現に専念してゐたにも拘はらず、何うして幕府の監視を巧みに避けてゐたかと云ふことである。これは彼の筆蹟が未だに他から、たとへ一片たりとも、発見されないのと同様に不可解な事実の一つである。

（渡邊大濤『安藤昌益と自然真営道』、原文は縦書き、旧字体の漢字は新字体に改め、仮名遣いは原文のままとした。）

以上見てきたように、昌益はその思想のラディカルさの故に、また、時代にそぐわない破天荒な着想の思想であつたが為に、その生存当時から、ある意

味ではひっそりとなりを潜めて活動せざるを得ず、その後継者たちも、不当な圧力に抗することができないまま、140年近くの眠りにつかざるを得なかったというべきであろうか。このことが、昌益が「忘れられざるを得なかった」第一の理由であろう。

次いで、昌益が「発見」され、ひとたび眠りを覚まされた明治後期という時代はどうであったのか。ここにも「忘れられる」大きな理由があった。明治という時代は、未だその思想を受け入れるだけの土壌ができておらず、上述したとおり、昌益を揺り起こした当事者さえ、幾分声を潜めざるを得ない時代であったこと、その思想に関心を持ち、これを最初に取り上げたマスコミも、国家から監視を受け、時に弾圧を被るという状況にあったこと。これが第二の理由であろう。

さらに、三度目に昌益の名が登場するのは、それから少しして、大正デモクラシーから昭和初期の、社会運動が活性化した時代である。ここに来てようやく、その思想の独創性、革新性に光が当てられようとし、研究者の関心が高まっていったと言える。しかし、それもつかの間、研究の成果が一般社会へ、国民の間へ浸透するいとまもなく、ファシズムの嵐の中に、またしても沈黙を守らざるを得ないのであった。この時代の思想活動については、多くの研究がなされているところであり、ここでは深入りしない。

そして第二次世界大戦が終了した1945年、日本育ちのカナダ人歴史家・外交官E・H・ノーマンがGHQと共に来日したことが、歴史の幸運というべきか、昌益を本当に目覚めさせる機会となったのであった。

4 「忘れられた思想家」における自然

ノーマンによって「忘れられた思想家」から戦後日本の社会に想起された安藤昌益は、「自然」を「自り然る」(ヒトリスル)とも読ませ、根本の気である「土」が運行して様々な姿を現しているという運動の状態であると説明している。その思想は、この「自然」の他、「互性」「土活真」「進退」「妙」「感」「転定」等、昌益独特の用語によって表されている。

昌益の思想については、先に述べたとおり、公刊

されたわずかの著作の他、大部にわたる未刊の稿本が残されたが、不幸にしてその大半は焼失した。近年における研究の成果によると、校本『自然真営道』に編まれている著述にも、またそれらと他の校本、『統道真伝』等の間には、その執筆時期に前後関係があり、また、稿本が必ずしも、刊行に備えた原稿の意味としてあるというわけでもなく、むしろ、その稿本を基にして、思想の全体系を整理し、そこから更に煮詰めていくことで、逐次その姿を現しているようにしていたものようでもある。その辺りの考究は他の研究を待つこととして、その昌益の思想の全体を俯瞰したとき、最もその特徴が現れ、その核心に至ることのできると予想される著作は、どの部分であるのか。

稿本『自然真営道』全100巻の前に置かれた「大序巻」は、その内容からして最後に執筆された昌益思想の精髓であるとされており、その中には、昌益固有の概念による世界観のほぼ全体像が展開されている。そしてまた、その巻末に付されている同稿本全体の目次である「統目録」において、その第25巻「良演哲論」を称して「真営道書中、眼燈此の巻なり」と書き記し、100巻に及ぶ思想体系の基本的な視点が、この第25巻に蔵されていることを明らかにしている。その構成は、「良子門人、問答語論」と「私法盗乱ノ世ニアリナガラ、自然活真ノ世ニ契フ論」の前後2編に分かれ、前編は、宝暦6、7年頃に開催された、門人による全国集會における問答・討議の様子を記録したものであり、後編は、これに昌益がコメントしたものであるという関係にあるとされている。

一方、昌益の生涯をたどってみると、没年は史料により1762年(宝暦12年)と確定されているものの、その生年は1746年(延享3年)に実施された宗旨改めの帳簿に「四十四歳」とあることから、逆算により推定されているに過ぎず、40歳頃までの、思想形成にとって重要な時期の足取りについては、全く明らかになっていない。その後の思想家としての活動も、いくつかの重要な文献、史料の発見がなされてはいるものの、現時点の研究の段階においては未だ不明のことがあまりに多く、その生涯が明らかになるような研究について、今後の専門家の研究

に待つところが大であると言わざるを得ない状況にある¹⁶⁾。

そこで、以上のとおり昌益のアウトラインを押さえた上で、次稿（中）においては、この、昌益の思想の精髓とされる「大序」、及び昌益自らが「眼燈」と称した「良演哲論」に表された昌益の自然観、人間観を取り上げ、さらに最終稿（下）においては、その地平に立って現代を照射し、筆者の最大の関心事である教育についての考察を試みたい。

注

- 1) 野口武彦「土の思想家 安藤昌益」『安藤昌益』、中央公論社（中公バックス、日本の名著19）、1984
- 2) 狩野亨吉（かのうこうきち）、1865-1942
近代日本の教育者・思想史家、秋田県大館市に生まれ、東京大学で数学、のち哲学を修めた。1898年第1高等学校長。1906年京都大学文科大学初代学長。のち中国・日本の前近代文献収集に努め、その多くは現在東北大学図書館に狩野亨吉文庫として収蔵されている。我が国の思想史上、安藤昌益、本田利明らの業績を発掘した功績は大きく評価されている。
なお、狩野亨吉に関する研究としては、次のものを参考にした。
鈴木正『増補 狩野亨吉の思想』、平凡社（平凡社ライブラリー）、2002
- 3) E・Hノーマン（エジャートン・ハーバート・ノーマン）、1909-1957
『ハーバート・ノーマン全集』（全4巻）（岩波書店、1978）（増補版2001）
カナダ・メソジスト派教会の宣教師として1897年来日し長野市に住み、人々からは「ノルマンさん」と親しまれていたという父ダニエル、母キャサリンの第3子として、避暑地の軽井沢において出生。
1939年カナダ外務省に入省し、外交官として、また日本思想の研究科として活躍。戦後、占領軍の一員として来日、また1946年にはカナダの駐日代表部首席（大使）となる。1949年12月安藤昌益に関する研究を英文で発表（日本アジア協

会紀要）、翌年『忘れられた思想家～安藤昌益のこと』（岩波新書、大窪愿二）を刊行。以降も、外交官として活動の傍ら、日本思想の研究を続ける。その後、アメリカで起こったいわゆるマッカーシー旋風の中で追いつめられた。1957年4月エジプト・カイロにおいて自殺。日本研究の著作が多数ある。

本国カナダにおいて長い間「忘れられた歴史家」となっていたところ、90年代に入って復権の動きがあり、2000年には完全に復権され、2001年5月29日、中日カナダ大使館の図書館は「ハーバート・ノーマン図書館」と命名されるまでに及んだ。（拙稿「Norman Conquest Again 『忘れられ』なかった歴史家 E・H・ノーマン」、日本大学大学院総合社会情報研究科電子ジャーナル第5号、2001）

- 4) 稿本『自然真営道』は、後述するところであるが、本体が100巻92冊であり、これに全体の序として巻数のない「大序巻」が前置されているので、都合101巻93冊となる。
- 5) 狩野亨吉「安藤昌益」『岩波講座・世界思潮』第3冊、岩波書店、1928
阿部能成編『狩野亨吉遺文集』、岩波書店、1958
- 6) 渡辺大濤（わたなべたいとう）：1879-1957
民間思想家で、新潟県に生まれる。幼少の頃寺の住職から読み書きを習い、14歳ころ家出して上京。苦学したのち大地礼賛の独特の新宗教（＝大地の宗教）を唱え、一人で全国を巡って布教した。また狩野亨吉の下で関東大震災で昌益を研究し、『安藤昌益と自然真営道』（1930）を著した。戦前公刊された昌益研究は、渡邊のこの1冊だけである。
- 7) E・カッシーラー著、中野好之訳『啓蒙主義の哲学』、紀伊国屋書店、1962
なお、次のものも参考にした。
バジル・ウィリー著、三田博雄・松本啓・森松健介訳『十八世紀の自然思想』、みすず書房、1975
吉田光邦『日本科学史』、講談社（講談社学術文庫）、1987
村上陽一郎『科学史の逆遠近法』、講談社（講談社学術文庫）、1995

- 相見昌吾『江戸思想史における儒教の命運』、驢馬出版、2001
- 8) 発見の経緯などについては、次の書籍に詳しい。
渡邊大濤『安藤昌益と自然真営道』、勁草書房、1970（注6）の同名書の復刻）
（再復刻）同『安藤昌益と自然真営道』（渡邊大濤昌益論集）農山漁村文化協会、1995
- 9) 狩野亨吉（談話）「大思想家あり」『内外教育評論』第3号、内外教育評論社、1908.1.8
記事の本文には強調のための傍点が随所に打たれているが、引用に際してはこれを無視した。
- 10) 「百五十年前の無政府主義者・安藤昌益」『日本平民新聞』、1908.1.21
森近運平『大阪平民新聞』（1907-1908）が改題されて『日本平民新聞』となったもの。
- 11) 狩野亨吉「安藤昌益」、阿部能成編『狩野亨吉遺文集』、岩波書店、1958、所収
- 12) 座談会「安藤昌益の研究者」『安藤昌益と自然真営道』、勁草書房、1970
狩野と渡邊が昌益のことを公表するには、極めて慎重な姿勢であったことなど、当時のいきさつは、戦後、渡邊大濤『安藤昌益と自然真営道』を復刻するに際して行われたこの座談会の中で語られている。
当該座談会における大濤の子、渡邊譲の発言によると、渡邊は、焼失前の稿本『自然真営道』の全巻に目を通してのことになるが、大濤自身はそのことを書き残していない。これが正しければ、稿本全101巻の全てに目を通した研究者は、狩野及び渡邊の二人ということになる。
- 13) 大窪愿二によれば、戦後になってハーバート・ノーマンが文献を渉猟しようとしたが容易には入手できず、戦前の唯一の昌益研究書である渡邊大濤『安藤昌益と自然真営道』も都留重人と嘉納履方が新聞広告を出して辛うじて入手したのであった。（『ハーバート・ノーマン全集』（第3巻）解説）
- 14) 野口武彦「土の思想家 安藤昌益」『安藤昌益』、中央公論社（中公バックス、日本の名著19）、1984
- 15) 萱沼紀子『安藤昌益からの贈りもの 石垣忠吉の物語』、東方出版、2001
- 16) 鈴木宏「儒道統之図 安藤昌益京都修学に関連する新資料について」、『日本史研究』第437号、日本史研究会、1999年1月（尾藤正英・松本健一・石渡博明『日本アンソロジー 安藤昌益』、光芒社、2002）